

秘法伝授の友人がまた鎮江へ

——江心洲野菜農家と日本人専門家の現場交流——

記者 李小亮 姜木金

昨昨日、「中日生態循環農業新技術普及会」に出席のため、鎮江を訪れている12名の日本人専門家が、有機農業、防除技術、野菜栽培、養殖技術とアイガモ農法等五つのグループに分かれ、句容市天王鎮、白兔鎮、丹陽延陵、丹徒区江心洲と長江乳業等の養殖現場へ出向き、指導を行った。記者は丹徒区江心洲の生態農業モデル園を訪れたグループに同行し、専門家と農家の交流現場取材してきました。

「ようこそ、ようこそ！古い友人よくきてくださいましたね。」午前9時30分に日本有機農業専門家松沼憲治氏、農学専門家斉藤春夫氏、農業経済専門家張安明氏を乗せた車が丹徒区江心洲生態農業区の玄関に入るやいなや、待ち望んでいた村民たちはすぐ暖かく迎えにやってきた。実は、二年前この三人は村民たちにキュウリ栽培過程での技術問題を解決するため、一度こちらを訪れている。彼らが農家に教えたことは、すでに開花したものもあれば、未解決の課題もまだ残っていた。そのため、村民たちは日本の専門家の再訪を心待ちにしていたのである。

江心洲の生態農業園區管理委員会の主任朱峰氏の紹介によると、松沼憲治氏は日本で有名な有機農業の専門家である。彼は1965年からキュウリのハウス栽培を始めて以来、40年間一度も連作障害が見舞われたことがない。それどころか、安定な収量と品質を常に維持してきた。一方、江心洲の農民たちは、キュウリ栽培を20年間継続してきたが、最近連作障害の深刻化と病虫害の急増で、収益は大幅に減少していた。そこで、鎮江市江心洲の科技局関係部署は2006年に松沼憲治氏らを現地指導に要請したのである。

三人は着いてまもなく農民たちに指導を始めた。「2m四方の穴を掘って、中に0.5kg～5kgの土着菌、45kgの菜種カス、あとは適量のもみ殻を入れて、じっくり発酵させる。出来たら、キュウリの元肥にしてください。とにかく土壤改良からやらないと……」。その後、酷暑にもかかわらず、益平村の倪建明等の農家の畑に足を運び、キュウリの病虫害診断を行った。彼らは畑を回っている間にも、村民たちに囲まれ、次から次へと質問を浴びせかけられた。

「去年彼らはうちの畑に来られなかったので、私は葉っぱを何枚か持って行って見せたら、すぐに病気の原因が分かって、その場で処方を出してくれた。にんにくエキスを薄めて葉面にスプレーすれば、虫よけになるよって。それから、樹の葉っぱエキスも同じ効果がある。みんなよく効いたよ。今年、彼らに土着菌の作り方を教わって、土壌改良を指導してもらいたいと思っている。」益平村の耿葉森氏は思い出深そうに二年前の専門家らの指導を語っていた。また、尹玉華氏は黒砂糖とキュウリのヘタでできた特製液で葉面散布する方法を聞き、帰ったら早速やってみるよと意欲満々な様子であった。

「私は日本でキュウリ栽培の時にもよく試験をするんだよ。まずわずかでもいいから試験用の田圃に使ってみる。うまくいったら広めていいし、ダメだったら、最初からやり直す。」畑で汗だくになった松沼憲治氏は帰り際に、村民にたち「栽培の時には、とにかく何度も試験を繰り返した方がいいよ。そのまままねをしていただけでは絶対にいけない！」と特に注意した。

(「鎮江日報」2008年7月6日)